キャラクター名: 蒼野　佑輔(アオノユウスケ)

プレイヤー名:

シンドローム	ブラックドッグ モルフェウス	ワークス	ドライバー	カヴァー	ドライバー
オプショナル		年齢	21	性別	男
覚醒	死	衝動	破壊	初期侵食率	34 %
出自	天涯孤独	経験	記憶喪失	邂逅	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	3	1	0		3	7
感覚	3	0	0			3
精神	1	0	0			1
社会	1	0	0			1

HP	35
行動値	7
(非装備時)	7
戦闘移動	12
全力移動	24

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ			交渉	1	
回避			知覚			意志	1		調達		
運転 :<運転:ニ輪4>	5		芸術：			知識：			情報： 噂話	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
モーフィングバイク	運転	7r+5		8		全力移動250m
Cr+鋼の馬+雷光撃+ﾊﾞｲｸ	運転	9r+5		14		C値-2
[80↑]Cr+MAXﾎﾞﾙﾃｰｼﾞ+鋼の馬+雷光撃+ﾊﾞｲｸ	運転	10r+5		24		80↑/C値-2/ｼﾅﾘｵLv回
[100↑]Cr+鋼の馬+雷光撃+ﾊﾞｲｸ	運転	13r+5		16		C値-3

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
理解者	P 信頼	N 悔悟		
記憶の中の誰か	P 好奇心	N 無関心		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 2	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
ヴィークルモーフィング	1	2	ﾏｲﾅｰ	至近	自身	自動		
効果：								
MAXボルテージ	1	4	ﾒｼﾞｬｰ	至近	自身	自動	80↑	
効果：	攻撃力+10/判定ﾀﾞｲｽ-1/1ｼﾅﾘｵLv回							
鋼の馬	2	2	ﾒｼﾞｬｰ./リ					
効果：	判定ダイス+Lv個							
ｺﾝｾﾝﾄﾚｲﾄ：ﾌﾞﾗｯｸﾄﾞｯｸﾞ	2	2	ﾒｼﾞｬｰ					
効果：	C値-Lv							
雷光撃	3	2	ﾒｼﾞｬｰ			対決		
効果：	攻撃力+[Lv×2]							
シークレットポケット	1							
効果：	「種別：その他」のｱｲﾃﾑをLv個まで隠しておける							
セキュリティカット	1							
効果：	セキュリティ解除、電子ロック解除							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

まず目に入ってきたのは、白い天井と自身に繋がれた沢山の管だった。看護師や医師たちが自分を不安げに覗き込み、中には目に涙を溜めている者もいた。どうしてベッドに寝ているのか分からず、何故彼等が肩を抱き合い涙を拭って喜んでいるのかも分からなかった。
担当の医師に聞いた話によれば、自分は押し入り強盗によって深手を負い、長い間昏睡状態に陥っていたらしい。親は死に、生き残ったのは自分だけであるとも伝えられた。しかし、それらを聞いても思い当たる節はなく、再度の検査によって"記憶喪失"と診断された。
警察の聞き取り調査も受けたが力になれることはなく、逆に自身が孤児であること、育ての親が死んだことを聞いた。自身の事を言われているはずなのに、どこか他人事のような雰囲気が漂っていた。
病院では奇妙なことが頻発した。医療機器がたびたびショートする、手に取った物質が変形してしまうなど、通常ではあり得ないような減少だ。事件の影響で何かおかしくなってしまったのだろうかと考えあぐねていると、一人の男性が自身を訪ねて病室にやってきた。男は「自分が身元引受人になる」と宣言し、手早く手続きを済ませると自分を連れて病院を出た。
男が運転する車の中で、奇妙な出来事は全てレネゲイドウィルスによって引き起こされているもので、自分はオーヴァードとして覚醒していると教えられたが、そのとき分かったのは自分が普通の人間では無くなってしまったことだけだった。
その男自身もオーヴァードであり、男が属しているUGNという組織にはそのようなオーヴァードが沢山所属しているらしい。異能が使えるのは自分だけではないと知り、少し安心した。
男は何不自由ない生活を送らせてくれた。高校を卒業し、就職と共に家を出ると申し出た自分に対し、まだ家にいてもいい、その方が独り身の自分にとっても有り難いと留めてくれた。男の指導によって力を適切に制御できるようにもなった。男はどこか、記憶の遙か彼方にいる育ての親に似ている気がした。
男が勧めてくれたUGNには入らず、ドライバーとして生計を立てることにした。オーヴァードである関係上、UGN関連の仕事を時折請け負うこともあったが、概ね普通の人生だ。